

## 往復書簡

今回からは、木之内勇樹氏（熊本県）と  
当機構理事長の高木勇樹との往復書簡が始まります。

拝啓 高木 勇樹様

この度、この様な貴重な機会を頂き大変有り難く思っています。普段からお手紙を書き留める事などなく、多々言葉足らずになることを何卒お許し下さい。

私は現在、妻と子供二人の四人家族で世界農業遺産に認定された、熊本県阿蘇郡において就農し、和牛の繁殖経営を行っています。

私は、非農家育ちで、ゼロから農業を初めて一代で従業員を抱えるまでの農場を築き上げた両親を見て育ちました。ゼロから一つの農場を築き上げるまでの人並みならぬ努力と苦勞を幼いながらに目の当たりにしながらも、「将来は、農業をやる。」と思っていました。当時の事を聞けば本当に大変な生活をしていただろうとは思いますが、子供であった私には、そんな苦勞を大きく感じることはなくむしろ、強い意思と明るい未来を描く両親と、その仲間の存在が子供ながらに大きく印象に残っています。その様な環境と大自然の中で育った事で、自然と農業の魅力に取りつかれていたのだと思います。

私は、後継者として、有限会社木之内農園の経営に入っていく事も出来たと思えますが、その道に進む事は全く考えもしませんでした。幼い時から動物が大好きで作物に対する興味よりも動物に対する関心の方が大きく、中学生の時、酪農・和牛の一貫経営をされている農家さんの所へ一ヶ月間泊り込みで行った時、「これだ！これしかない。」と強く感じ、畜産をやって行く事を決めました。思えば、自分自身が良い意味で利用できる環境と興味がある事が一致

した瞬間だったのだと思います。

私は今、農業界で起きている問題、国や行政、官僚の方々  
が考えられている事など難しい事は正直よく理解出来ない  
ないかもしれませんが、しかし人間にとって最も重要な食を支  
える農業は世界中で誇れる物だと確信しています。今ほとん  
かく農業の現場で自分自身の技術と感覚を磨き上げます。

そしてこれから先、どの様な経営者になれるか分かりませ  
んが、どんな困難な事が起き様とも「生涯、農業人。」であ  
り続けます。

平成二十六年七月吉日

木之内 勇樹(きのうち ゆうき)

一九八九年 熊本県阿蘇郡生まれ  
二〇〇八年 熊本県立熊本農業高校(畜産科)卒業  
二〇一〇年 熊本県公共育成牧場研修  
二〇一一年 就農



後列左が筆者



牛舎建設の様子

敬具

拜復 木之内 勇樹 様

エルニーニョの影響の見方が変わり、気象庁の予測が寒い夏から一転暑い夏に。日本列島は猛暑と大雨で悲鳴をあげています。八月七日は暦の上では立秋ですが、いかがお過ごしですか。

もしかすると、酪農・和牛の農家さんのところに一ヶ月泊り込み君の運命が決まった頃、私は君の実家を訪ねていたのではないかと思います。

君の父君との出会いは私が企画室長の頃、もう二十年以上前のことです。新政策（食料・農業・農村政策の方向）を省内で論議した際、当時新進気鋭の農業経営者であった父君からいろいろお話を伺ったことが縁で、これまで農業経営とは何か、農業・農村の現場の実態などを教えていただき続けています。

そのご子息である君がご両親の背中を見ながら育ち、中学の頃天の啓示を受けて和牛の繁殖経営に取り組まれ、ご夫婦で一步一歩着実な経営展開をされていることは、本当にお美事としか言いようがありません。

君は「農業界で起きている問題、……難しいことは理解出来ていないかもしれませんが」と言われていますが、長年官僚として農政に携わり、現在ボランティアでプロ農業の総合支援に取り組んでいるものからすると、至極当然のことだと思います。

「難しい事」の多くは、君のような農業経営者にとってははどうでも良い、利害の調整や意地とメンツのぶつかり合いみたいなことがほとんどだからです。

大事なことは、「人間にとって最も重要な食を支える」――

私の理解では需要者を常に意識した経営をすることを通じて「農業は世界中で誇れる物」にする、つまり産業として持続する農業経営を確立することだと思います。

農業の現場で技術と（経営）感を磨き上げることが生涯農業人であり、世の中に受発信出来るプロ農業経営者になる王道だと確信します。

次回は君の先達である父君の十年ほど前の著作「大地への夢」をどう受けとめておられるかをお聞かせいただき、更なる話を進めていけたらと思います。

平成二十六年八月吉日

敬具

## 高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

一九四三年 群馬県生まれ

一九六六年 東京大学法学部卒後農林省入省。食品流通局砂糖

類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。

一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官

二〇〇二年 ㈱農林中金総合研究所理事長

二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任

二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長  
現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

